

上村松園の唐美人図の表現研究

－《楊貴妃》の小下図からの想定制作を通して－

唐 曉琳（愛知県立芸術大学大学院）

1. 研究概要

本研究は、上村松園《楊貴妃》（松伯美術館蔵、大正7（1922）年）の制作プロセスを構想の段階から追究し、彩色された4枚の小下図の画面構成を分析することによって、松園が唯一の横構図の小下図を選んで《楊貴妃》を描いた意図を推測し、完成されていなかった縦構図の小下図から《貴妃出浴図》という想定復元画を制作した。完成した《貴妃出浴図》により、松園の唐美人図に関する理解を深めるだけでなく、中国の古典主題の芸術表現について新たな視点を提供することができた。

2. 上村松園と唐美人画

上村松園（明治8（1875）年～昭和24（1949）年）は、明治、大正、昭和の各時代にわたり活躍した日本の女流画家である。松園が活躍した時期の日本は近代化と開国による西洋化を経験し、芸術界も大きな変革を遂げ、さまざまな流派や新たな画風が現れた。なかでも松園の作品は、西洋絵画の写実性と東洋絵画の伝統的な美意識を融合させている点で特徴的であり、当時美人画の名手として名を馳せ、非常に高い芸術的価値を有している。

松園は中国文化への造詣が深く、彼女の縮図冊には中国の仕女画の模写作品が多く見られる。松園は、『青眉抄・青眉抄その後』¹の中で、江戸時代の錦絵の題材を好んだ時期もあれば、さまざまなバリエーションを展開した支那の様式に影響を受けた時期もあったと、自らの画歴を振り返っている。また、「支那絵の古画、絵巻物、ときどきは仏画などをも参考に資する」²と、自身の言葉で語っている。現在においても、展覧会等で、松園が縮図冊に描いた多くの臨写を見ることができる。

現存の確認できる松園の唐美人図として、《梅花粧図（下図）》（1897年）、《孟母断機》（1899年）、《天人》（1918年）、《梅下佳人》（1924年頃）、《春苑》（1935年）、《楊貴妃》（1922年）、《楚蓮香之図》（1924年）、《楚蓮香》（1923年頃）などがある。

¹ 『青眉抄・青眉抄その後 上村松園全随筆集』求龍堂、2010年

² 「作画について」前掲註1、102頁

3. 研究対象作品について



〔図 1〕《楊貴妃》



〔図 2〕《楊貴妃》

松園筆《楊貴妃》〔図 1〕は大正 11（1922）年の第 4 回帝展に出品されたものである。この作品は、大正 7（1918）年の《焰》以来、4 年ぶりの帝展出品作であり、唐代の詩人白居易が作った詩『長恨歌』を題材に、楊貴妃の湯上がりの情景を描いたものである。

《楊貴妃》が制作当時、松園が「楊貴妃出浴図」を画題としながらも、本画としては描かなかった複数の小下図が存在することを確認した。それぞれの小下図には異なる構図で人物が描かれており、これらは松園の作品研究において貴重な資料である。現存する松園の小下図には、彩色された 4 枚の小下図と下書き状態の白描の小下図の 2 種類がある。また、松伯美術館には松園が《楊貴妃》の制作のために描いた人物写生と大下図〔図 2〕が所蔵されている。これらの下図から、松園の制作経緯を探ることがある程度可能であると考える。

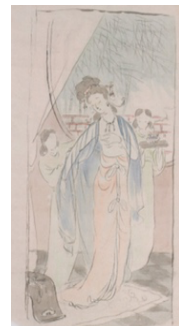
本研究では、着色された 4 枚の小下図〔図 3〕に注目して分析を行い、《楊貴妃》の構図の変化を含む松園の創作過程を、小下図から最終的な大作絵画まで追究する。



小下図 1



小下図 2



小下図 3



小下図 4

〔図 3〕 《楊貴妃》の制作ために彩色した四つの小下図

中国美術や日本美術の中には、『長恨歌』を題材とした作品が数多く存在し、表現形式は時代や画家の個人的な解釈によってさまざまに展開している。松園は楊貴妃を歴史上の人物としてだけでなく、自身の友人としても捉えている。松園が《楊貴妃》の中の楊貴妃像の微妙な表情と優雅な座り姿に、高貴な人物の性格を反映させているようで、これは、松園が中国文学の独自の解釈に基づいて、楊貴妃の姿勢を心の中に描いたことを示している。中国の伝統的な楊貴妃像に見られる政治的役割の強調とは異なり、松園の楊貴妃像に

対する印象は、より人間的で感情的であり、彼女の個人的な魅力が強調されている。

また、松園は楊貴妃を「心と心が無言のうちに相通じる」³友人として語っている。写真資料の中で、《楊貴妃》は松園の自宅の応接室に置かれ、常に松園に付き添い、彼女と楽しそうに交流している。この感情のつながりは、時間、空間、文化を超えた交流と理解を示している。

4.4 枚の小下図の分析

4枚の小下図の異なる構図は、松園が「楊貴妃出浴」の画題を表現する上での松園の創造的な着想と多様な構成を示している。それぞれ楊貴妃の姿を立ち姿、座り姿、体の角度、視線等、異なる着眼点から描いており、豊かな芸術表現を見せている。また、4枚の小下図の情景はそれぞれ特徴があり、隔扇門、窓紗、床、簾、植物などの要素を巧みに使って、楊貴妃の出浴場面の多様な可能性を示している。小下図では、侍女の人数が1人、2人、3人と異なるが、侍女の数を変えて描くことで、楊貴妃の地位と宮廷生活の豪華さを反映しようとする松園の試みを読み取ることができる。

一方で、4枚の小下図はすべて置物台に簪が描かれており、松園の心の中にある楊貴妃と簪の深い結びつきを表している。楊貴妃の玄宗への愛の象徴として、松園は各小下図の構図で簪を巧みに用いている。これらの小下図で表現される文学と歴史伝説の組み合わせは、松園の文学の素養と絵画に対する独特な理解を示している。

4枚の小下図の構図を分析した結果、松園が小下図2を選んだ理由が推測できた。横構図形式は、松園のこれまでの唐美人図の構図から脱却し、空間の創造と人物の表現において革新的であったと考えられる。そのため、松園は明治から大正にかけて、自身の絵画を探究する中で、4年ぶりの官展の構図として小下図2の横構図を選んだのである。しかしながら、小下図3の構図形式は、松園の唐美人画の通常形式に最も近く、また、同じ題材で描かれた中国の伝統的な仕女図の構図にも似ている。以上の考察をもとに、小下図3の構図を選び、研究作品《貴妃出浴図》の想定復元に取り組み、松園の唐美人図の一貫した画風を再現していく。

5. 《貴妃出浴図》の制作過程

これらの分析結果を踏まえ、松園がどのように立ち姿の楊貴妃像のイメージを創り上げたのか探るため、円山・四条派の画風を受け継ぐ《楚蓮香之図》[図4]の現状模写を行い、松園の一貫した唐美人図の表現技法を探究したいと考えた。

博士前期課程で《楊貴妃》の現状模写と《楚蓮香之図》の現状模写の実施によって、松園の唐美人図の画面構成や線描に関する理解を深めることができた。現状模写によって、松園の唐美人図の画風のみでなく、作品中の衣服や調度品などの細部の描写についても理解も深められた。この経験を踏まえて選んだ小下図3の構図にしたがい、人物と環境それ

³ 「友人」前掲註1、156頁

ぞれのモチーフから《貴妃出浴図》の下図の制作を行った。また、制作の際には、松園の一連の唐美人図の画風に近づけるよう留意して取り組んだ。

松園の下図の観察から、それらが和紙に筆で描かれていたことを確認した。松園は制作過程において、筆で描く伝統を守っている。そのため、下図を筆で描くことは、研究作品を制作する上で欠かせない作業だと考えた。そこで、本画を描く前に、鉛筆で描いた《貴妃出浴図》の下図の上にトレーシングペーパーを置き、筆で墨線の下図を描いた。

そして、木枠の内側と同じ大きさの木製パネルに墨線の下図を張り込み、木枠に裏側からはめ、半透明である絹の性質を利用して、墨で描かれた下図を透き映し、筆で本画の線描の転写を行った。

現状模写の経験をもとに、《貴妃出浴図》の彩色を行った。使用する主な色彩構成は《楊貴妃》を参考にし、墨（油煙墨、青墨）、胡粉、群青、青（頭青、四青）、藍（花青）、白緑、焼白緑、緑青、若葉（黄口、中口）、黄緑、藤黄、黄土、辰砂、鎌倉朱（赤口、黄口）、丹、茜、弁柄、金泥とした。

彩色まで描いた研究作品は、松園の作品によく用いられる掛け軸に仕立てた。日本の伝統的な三段本風袋おしで、上下はつくり土花紋の上遠州裂、中廻しと柱は花紋の銀欄、一文字は唐花唐草紋金欄で表装した。



〔図 4〕《楚蓮香之図》の現状模写、2022 年



〔図 5〕《貴妃出浴図》、171×83cm、絹本、2024 年

6. 総括

研究作品《貴妃出浴図》[図 5] は、松園の唐美人図の画風と中国の伝統的な画風を取り入れ、松園の絵画の制作過程と画風を可能な限り再現したものである。この制作を通じて、松園の楊貴妃に対する印象は、絵画だけでなく、『長恨歌』や『楊太真外伝』などの文学作品や絵画作品から得たものであることが判明した。そこで、筆者はこれらの要素を十分に考慮して小下図を復元制作した。松園の画風と表現技法を忠実に再現することを通じて、研究作品《貴妃出浴図》は、構成形式において中国の伝統的な画風を体現しているだけでなく、松園の一貫した唐美人図の画風を保持した作品に仕上がったと考える。

以上の研究と復元制作を通して、自筆《貴妃出浴図》の構図形式は、中国の古典的画題である「楊貴妃出浴」の絵画形式を反映させ、日本画家としての松園の中国主題画に対する独自の見識と美意識を示すものになった。本研究は、松園の唐美人図に関する理解を深めるだけでなく、中国の古典主題の芸術表現について新たな視点を提供するところにもある。《貴妃出浴図》の構図形式は、中国古典絵画に新しい芸術様式を取り入れただけでなく、松園の唐美人図と円山・四条派の様式との融合が反映されており、その構図は伝統と革新の間の独特な魅力を示しているのである。

主要参考文献

上村松園『上村松園全随筆集 青眉抄・青眉抄その後』2010 年

大河原典子「黒髪白肌の系譜―上村松園の技法と表現―」独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、『科学研究費助成事業―東京文化財研究所』16K05759 号、2019 年

戸張泰子「上村松園再考」『女子美術大学博士論文』女子美術大学、2006 年

仲町啓子『「仕女図」から「唐美人図」へ：近代東アジアにおける「美人図」の特色と意味』実践女子大学、2008 年